

私は徳川邸を見舞った帰りにちょうど道順で澄子さんの家の前を通った。ところがその家は焼け出されて澄子さんの弟の名前で立札が出ていた。牛込河田町に転居したということであった。この前、ヨーロッパから帰った時、私は早速にこの家を訪問したのだが、その時はお母さんが出て来て挨拶をした。奥の方に澄子さんらしい声が聞えたが、ついに顔を見ることが出来なかった。そして今度この焼跡の家を見ただけで私はこの世の無常を感じざるを得なかった。私はヨーロッパ放浪中も肌身離さず持っていたものがある。それはかつての日澄子さんに貰った写真と手記とであった。が、この焼跡の家を見てから私はそういう記念物を保存するに忍びず、ついに焼き捨ててしまった。

それから大分経ってから私は蘆花公園に徳富蘆花夫人を訪ねた。寒い夜であった。夫人とコタツを囲みながら四方山の話につれて、私はこの話を蘆花夫人に物語ると、夫人は別間から母校出身者名簿を取り出してきて、頁をくってみると何ぞ計らん清水澄子という名前は死亡者の仲間に入っていた。家も灰になり、人も灰になり、すべては無より生じて無に帰ったわけだ。さすがに蘆花夫人も「お可哀想に」という一語を發したのみで沈黙が続いた。

十六 デモクラシー 土民生活

私が最初にヨーロッパから帰った時の第一声は「土民生活」ということであった。それは大正九年当時の帝大で試みた講演の標題であり、社会主義同盟の機関誌『社会主義』誌上に掲載した論文も同じくこれであった。その土民生活デモクラシーという言葉の由来は次の通りである。

大正二年、私が初めて旧友エドワード・カーペンター翁を英国シェフィールドの片田舎、ミルソルブの山家に訪うた時、私は翁の詩集『トワアド・デモクラシー』について翁と語ったことがある。そしてその書名「デモクラシー」の語が、あまりに俗悪にして本書の内容と少しも共鳴せぬのみならず、われらの詩情にショックを与えることの甚だしきを訴えた。するとその時、カ翁は「多くの友人からその批評を聞きます」と言いながら、書架よりギリシャ語辞典を引き出してその「デモス」の語を説明してくれた。その説明によると、「デモス」とは「土地につける民衆」ということで、決して今日普通に用いられるような意味はなかった。今日のいわゆる「デモクラシー」はアメリカ人によって

悪用された用語で、本来の意味は喪われている、というのがカ翁の意見であった。そこで私は今、この「デモス」の語を「土民」と訳し、「クラシー」の語を「生活」と訳したのである。更にこの「デモクラシー」という語を今日の姿勢にあてはめて具体的に言い表わせば「土に還れ」という意味になると思う。「土に還れ」という思想は、近世においては十九世紀初頭のイギリスやフランスに起った思想であり、イギリスのゴッドウィン、フランスのシャルル・フーリエの思想であり、これらの諸人物に先駆けたものは近代思想の父と言われるジャン・ジャック・ルソーである。ルソーは十八世紀のヨーロッパが生んだ近代思想の父と言われる人だけに、一般の先駆者が「古代ギリシャに還れ」という復古思想に止まった時代に、更に一步を進めて、「自然に還れ」と唱えた。しかるにシャルル・フーリエや、イギリスの社会思想家等はまた具体的に「土に還れ」という思想を鼓吹した。例えばウィリアム・モリスとかラスキンとか前述のゴッドウィンとかいうような人々はこれである。

翻って我が日本の近代思想を検討すると、すでに徳川時代にこれに匹敵する自然主義の革命的思想が起っている。近頃世の注目を引くようになった安藤昌益の如きはそれであった。彼は「自然真営道」という言葉を以て、すべての人が土を耕すのが真実の道であるというのである。この安藤昌益はフランスのジャン・ジャック・ルソーに先立つこと約百年である。これは一寸考えると驚くべき事実のようにも見えるが、ヨーロッパのルネッサンス時代に、如何なる思想がヨーロッパに醸酵しつつあったかということ想像せしめる一つの手だてにもなる。というのは、安藤昌益時代の日本には、オランダ人による自然主義が、最も急激な調子をもって伝わって来たことが、これによって窺われるからで

ある。当時のオランダは、スペインの宗教的強權の束縛を脱して、自然生活の強烈な理想を孕んで世界的に進出した時代なので、その感化を受けた日本の新進学者がまたこれに油をそいで、その勢力を進展せしめたことは想像するにたかたない。日本における安藤昌益の思想は、一種の泡沫の如く一時的の存在を記憶に残して消え去ったかのようにも見えるが、それは表面のことであって、日本の思想界、文芸界には底深い流れが既に溢れていたことも想像するにたかたない。元禄時代から日本の文芸思想、社会思想に汪流しておった革命的思想は、実に盛んなものであった。例えば本居宣長でも、その先輩である賀茂真淵でも、これを一種の革命的思想家と見ることが出来る。文芸の方では、近松門左衛門、井原西鶴なども一種の革命を社会にもたらしたものである。井原西鶴の如きはオランダ西鶴の称さえ持ったほどの人物で、如何にオランダの自然主義に傾倒したかということが想像されるのである。こうした事情から西洋並びに日本の近代思想というものが、如何に自然主義或いは土民思想というものに深く根ざしておったかということが想像出来るのである。

土民生活デモクラシーということとは、それ故に政治上では自治の生活ということである。農民が土地を耕しつつ、自分達の社会生活を営み、労働者が、自分達の工作に努力しつつ組合生活を發展させて行くことは、同じく土民生活であるべきだ。フランスのサンジカリストの運動が、自分達の社会的權益を拡大しつつ、同時に自分達の組織、自分達の修養、研究を向上發展することに努力するという建設的方面を無視しなかったことは、この運動に一脈の光明を発揮したものである。こうした趣意においてこそ田野における農民の生活活動と、工場における労働者の努力とは互いに相助け、相補って共同の利益

を増進することが出来るようになるのである。生産組合とか、消費組合とかいうものは、こうした広い視野のもとにおいてこそ、初めて存在の意義があるのである。私がヨーロッパから帰ってきて、一方においては農民自治協同主義を宣伝すると同時に、サンジカリズムの趣意を説いて廻ったのはこの理由による。つぎに掲げるのは、大正十年に『社会主義』誌上に発表した「土民生活」〔本著作集第二巻所収〕と題する文章中の冒頭と結語とである。

一

人間は、自分を照す光明に背を向けて、常に自分の蔭を追ふて前に進んで居る。固より其一生を終るまで、遂に其蔭を捉へ得ない。之を進歩と言へば言へるが、又同時に退歩だとも言へる。長成には死滅が伴ふ。門松は冥途の旅の一里塚に過ぎない。

人間は、生きやう、生きやう、として死んで行く。人間は、平和を、平和を、と言ひながら戦つて居る。人間は、自由よ、自由よ、と叫びながら、囚はれて行く。上へ、上へ、とばかり延びて行つた果樹は、枝は榮え、葉は茂つても遂に実を結ばずして朽ち果てる。輪廻の渦は果し無く繰返へす。エウオリュシヨンといふも、輪廻の渦に現はるゝ一小波動に過ぎない。進化は常に退化を伴ふものである。夜無しには昼を迎へ得ない。日の次には夜が廻て来る。

二

人間は、輪廻の道を進んで果しなき旅路を急いで居る。自ら落着くべき故郷も無く、息ふべき宿

も無く、徒らに我欲の姿に憧憬れて、あえぎ疲れて居る。旅の恥はかき棄てと唱へて、些かも省みる処なく、平気で不義、破廉恥を行ふ。今の世の總ての人は、悉く異郷の旅人である。我が本来の地、我が本来の生活、我が本来の職業、といふ如き思想は、之を今の世の人に求めても得られない。彼等の生活は悉く是れ異郷の旅に外ならぬ。總ての職務と地位とは腰掛けである。今の世の生活は不安の海に漂ふ放浪生活に外ならぬ。放浪生活に事務の挙る訳が無い。教師も牧師も官吏も商人も百姓も大臣も、我が故郷を認め得ずして生涯旅の恥をかき棄てゝ居る。旅の恥をかゝんが為に競ひ争て居る。疲れ果てゝ地に倒れたる時、我蔭の消ゆると共に人は幻滅の悲哀に打たれるゝであらう。国家、社会が、幻滅の危機に遭遇したる時、乃ち大変革が来るのである。

十一

地のロタシヨンは吾等に昼夜を与へ、地のレボリユシヨンは吾等に春夏秋冬を与へる。此昼夜と春夏秋冬とに由りて、地は吾等に産業を与へる。地の産業は同時に又地の芸術である。芸術と産業とは地に於ては一である。地の子、土民は、幻影を追ふことを止めて地に着き地の真実に生きんことを希ふ。地の子、土民は、多く善く地を耕して人類の生活を豊かにせんことを希ふ。地の子、土民は、地の芸術に共鳴し共働して穢れざる美的生活を享楽せんことを希ふ。土民生活は真である、善である、美である。

ギリシヤ以来の伝統を継承した土民生活の理想を実現する方法として、都会における工場労働者の

ために最も必要なことは、自治的な直接運動であり、それはフランスに起ったサンジカリズムの運動であると考えて、私は努めて労働組合の中に入ってそのことを説きまわった。大正十四年に全国印刷工聯合会の依頼によって、私は『サンデカリスムの話』〔本著作集 第五卷所収〕という小冊子を書いたが、その冒頭に次の如く書いてある。

一

サンデカリスムとは何であるか？ 之を其文字の上から解釈すれば、組合主義といふことである。「サンデカ」とは仏蘭西語で組合といふ意味に外ならない。併し、世間一般に伝へられて居るサンデカリスムとは、単に組合主義といふことでは無く、もう少し特殊な意味が加はつて居る。然らば、それはどんなことであるか。之を一語にして言へば、労働組合が、単に労働者の利益を防護及び拡張するばかりでなく、自ら中心になつて社会の改造を断行しやうとする運動である。此点は英国の労働組合（エド・ユニオン）と大いに異なる処で、トレッド・ユニオンは単に労働者の利益防護を目的とするに過ぎない。然るにサンデカリストの労働者は、もつと大きな目的を懷抱して居るのである。

カアル・マルクスは、『共産党宣言』の中に、「労働階級の革命の第一歩は、平民をして権力階級の地位に登らしむるに在り、即ち民主主義の戦闘に勝を制するに在る」と言つてゐるが、是れが抑も、共産党や、社会民主党が、労働者を迷路に導く第一歩であつて、サンデカリスムの排斥する所なのだ。「民主主義の戦闘に勝を制す」といふのは、議会に多数を得ること、社会民主党では解

釈するのであるが、こんなことで、労働者の自由も幸福も実現されないことは、普通選挙が行はれてから五十余年の歴史を経過した欧羅巴の事実が証明してゐるではないか。又、共産党が「権力階級の地位に登」つても、労働者の境遇がさつぱり明るくならないことは、露西亞の真情が証明してゐるではないか。マルクスの社会民主主義と独裁的共産主義とは、労働者と労働組合とを踏台にする政治家という遊食の徒に国家の権力を委ねやうとするものである。是れほど危険な仕事は無い。是れほど労働階級を賊するものは無い。是れほど労働者を侮辱するものは無い。サンデカリスムは即ち此危害に眼覚めた仏国労働者の初めて思ひ立つた運動である。

抑も国会は民心を緩和し徴税を円滑に行ふために権力階級が設けた制度で、其国会内の頭数の請負と、勢力の転換とを調和的行はふとするのが政党なのである。労働階級が此中に入つて行くのは、恰もブルジョアの好きな、シルクハットとフロツクコオトで労働しやうと試みる様なもので、動きのとれなくなるのは必然のことではないか。適々国会といふシルクハットに馴づみ、政党といふフロツクコオトに慣れると、其時は却て労働者の敵となつて之を迫害するか或は味方らしく扮装して労働者を誘惑する。欧羅巴に於ける労働党出の政治家は何れも其好実例を示してゐる。

シルクハットとフロツクコオトを着て労働するのは葬式馬車の馭者だけに止めて置きたいものぢやあないか。

二

サンデカリスムの成立に依て、社会改造の中心は無産政党から労働組合に移つた。其サンデカリ

スムの唯一最上の模範とも称すべきは仏国の労働総聯盟 (La Confédération Générale du Travail) である。故に私は此仏国 C・G・T に就いて些か解説を試みたいと思ふ。処が、此 C・G・T が初めて大成されたるアミアン大会 (一九〇六年) に於て宣言せられた綱領は、サンデカリスムの主義精神を最も能く表明したものだと言はれてゐる。それ故、私の解説の順序としては、此有名なアミアン綱領から初めることが必要にして且つ便利であると思ふ。アミアン宣言にはこう書いてある。

アミアン大会は左に掲ぐる労働総聯盟規則第二条を確認する。

「労働総聯盟は一切の政党政派を離れて、雇主と雇人とを消滅させる為に戦はうとする総べての労働者を団結する」(第二条)

大会は此宣言を以て、資本階級が労働階級に加へた精神的及び物質的の圧迫と搾取とに対して叛逆する労働者の経済的分野に於ける階級闘争を承認するものと見做す。

大会は此学理的主張を次の諸点に依て精確にする。

サンデカリスムは、日々の要求の事業として、労働時間の短縮とか、賃銀の増額とか、言ふ様な即時的改良の実現によつて、労働者努力の調整、労働者幸福の増進を追求する。併し此様な行動はサンデカリスムの事業の一部分に過ぎない。サンデカリスムは資本の徴収を以てするに非ざれば実現することの出来ない完全な解放を準備する。サンデカリスムは、総同盟罷工を以て其活動の方法と認め、今日は反抗の団体である組合が、将来に於て、生産と分配との団体となり、社会改造の基礎となるべきものと見做す。

大会は、此日常的及び未来的の二重事業が、賃銀生活の地位より生ずるものであること、及び其地位は、哲学的政治的の意見或は傾向の如何に係はらず、総ての労働者をして、サンデカ(組合)といふ須要な団体に加入するの義務を負はしめることを宣言する。

其結果として、大会は、聯盟以外に於て、各個人が哲学上或は政治上の自己の意見に沿ふた闘争に加入する絶対自由を認める。併し其と同時に、其外部に発表する意見を組合内に注入せざらんことを要求する。

又、大会は、団体に關して宣言する。サンデカリスムが其最極の結果に達する為には、其経済的行動が直接雇主に対して行はねばならぬことを。そして苟も加盟団体たる諸組合、諸団体は、聯盟外にあり又は聯盟と併行して全然自由に社会改造を追求する諸党諸派に關係しないことを。

この趣旨にもとづいて諸種の産業における諸種の労働組合が発足して日々その数を増し、一時はそれが日本の労働界を風靡するかに見えた。

この運動の中心に立った人々の中には次の如き有為の諸人物があった。印刷工聯合会の組合員としては、水沼辰夫、渡辺幸平、布留川桂、延島英一、和田栄太郎、綿引邦農夫、その他がいた。また、一般労働組合の中には、高橋光吉、鶴岡貞吉、村田常次郎、白井新平、宇田川一郎、江西一三、逸見吉三、その他随分多くの名前を列記せねばならぬと思うが、今は私の記憶から逸してしまつた。

なお当時活動が続けていた多くの組合があったのだが、今記憶に残っているのは日本労働組合自由聯合協議会、東京技工組合、関東金属工組合、全国印刷工聯合会があり、その印刷工聯合会の中に、東京印刷工組合、横浜印刷工組合、上毛印刷工組合三山会、函館印刷工組合、京都印刷工組合、千葉印刷工組合千工会、長野印刷工組合兄弟会、大阪印刷工組合などがあった。

十七 農民自治会

十七 農民自治会

大正十二年九月一日の大震災に遭遇して、われわれは、新たな方法をもって運動を起さねばならなかったことはすでに述べた通りである。諸方に自由聯合主義の労働運動が計画され、黒色青年聯盟が組織され、雨後の筍の如く種々なる団体、種々なる運動が起された。どの運動にも直接または間接に、私は関係を持ったけれども、私の最も深く共鳴したものは、農民自治会のそれであった。私は日本の農民の間に自主的の組合運動のないことを不思議に思っ、まずこの運動から手をつけなければならぬということを中心として、ちょうどその時下中弥三郎君、中西伊之助君らの間にもその意図があつて、まもなく農民自治会の組織が試みられた。機関誌として『自治農民』という小さい雑誌が発刊せられ、組合員も予想外に勢よく増加し、その前途には洋々たるものが展望された。この会合で私が最初に行った講演は「土の権威」と題するものであった。たしかキリスト教青年会館の一室で行ったと思うが、この講演はかなりの印象を聴衆に与え、評判もよかった。大西伍一君のペンによ